

[論文]

## カール・バルトのエキュメニカルな神学への道 (4)

—— 世界教会運動との関わりの中で ——

佐藤 司 郎

はじめに

- (一) エキュメニズムとバルト
  - (二) エキュメニカルな教会論〔以上本論集第2号〕
  - (三) ボンヘッフアーとバルト〔第3号〕
  - (四) アムステルダム大会への参加〔第10号〕
    - (1) シュトゥットガルトとアムステルダム
      - a. 「シュトゥットガルト罪責宣言」への道
      - b. シュトゥットガルトからアムステルダムへ〔本号〕
        - 1) シュトゥットガルトの受容
        - 2) アムステルダムへ向けて
      - c. 1947年の二つの貢献
        - 1) 『聖書の権威と意義』
        - 2) 『<sup>キルヒエ</sup>教会——<sup>ゲマインデ</sup>活ける主の活ける教会』
    - (2) アムステルダム大会
      - a. 開会講演「世界の混乱と神の救いの計画」
      - b. 冷戦の影響〔以下、次号〕
      - c. ダニエルーとニーバーからの問いかけ
    - (3) アムステルダムの余韻
  - (五) エヴァンストン
- まとめ

## b. シュトゥットガルトからアムステルダムへ

### 1) シュトゥットガルトの受容

シュトゥットガルト罪責宣言を最初に受け入れたのはフランスのプロテスタント教会であった。ピエール・モーリーとフィセルト・ホーフトはシュトゥットガルトの会議のあと直ちにフランスのニームに向かい、フランス・プロテスタント教会の第6回大会に参加した(10月23日～29日)。フランスの教会はシュトゥットガルト罪責宣言をドイツ教会との関係回復を可能ならしめる宣言として喜びをもって受け入れ、さらに「霊的かつ道徳的な復興のための共通の働き」という課題に自ら取り組む姿勢も表明した。フランス・プロテスタント教会につづく他の声明文や書簡にもフランス・プロテスタント教会が示したのと基本的に同じ姿勢をわれわれは確認することができる(ドイツ教会に宛てた「アメリカ・クエーカー救援機関の使信」〔1945年末〕、「米国キリスト教会兄弟評議委員会執行委員会」〔1946年1月15日〕、ヴルム監督宛「カンタベリー大主教の書簡」〔1946年2月13日〕<sup>1</sup>。戦勝国の優越意識に基づくファリサイ的な断罪は見られない。ドイツの教会と国民が懸念した、そしてフィセルト・ホーフトもそうならないようにシュトゥットガルトの会議の終わりに約束した宣言の政治的誤用も基本的に起こらなかったと言ってよいであろう。

オランダ改革派教会もシュトゥットガルト罪責宣言を積極的に受け入れたが、他の教会と少し異なる反応も示した。同教会は1946年3月9日の大会で発表したドイツ福音主義教会に宛てた応答において、世界に対するドイツの罪責に教会も共同の責任を負っているとの明確で率直な宣言によって連帯と協働の道が再び開かれた恵みを神に感謝した。そのさいオランダ教会は自国が筆舌に尽くしがたい苦しみを受けたことだけでなく、「われらの救い主がお生まれになったイスラエルの民にさらにいっそう大きな苦しみ」が及んだことにも言及した。またこの声明文でオランダの教会は自らの罪責も告白した。「われわれは神の赦しから生きることを、またこの神の赦しに基づいて新しく始めることを許されよう。神はわれわれの教会にナチズムとの闘いを遂行する力を贈り与えたもうた。この闘いにおいてわれわれは誠実さにおいても、苦しみを引き受ける用意においても、勇気においても十分でなかったと神と世界との前に正直に告白する。しかしわれわれは神に、告白することの本当の意味を神がわれわれにふたたび明らかにしてくださいました恵みのゆえに感謝する。ドイツ告白教会が決断の困難な時代にあって神の道具としてよりいっそうその深い

<sup>1</sup> M. Greschat (Hg.), Die Schuld der Kirche, Dokumente und Reflexionen zur Stuttgarter Schulderklärung vom 18./19. Oktober 1945, 1982, S.302ff.

意味に目を開くために奉仕したということにわれわれは感謝の義務を負う』<sup>2</sup>。こうしてシュトゥットガルト罪責宣言は他の教会の罪責の告白も引き出した。ところでこの声明文の中の「ドイツの教会の民が全体としてこの宣言を支持するかどうかについてわれわれには全く明らかではないが……」という件はシュトゥットガルト罪責宣言に対するドイツ教会全体の態度を問うものであった。同様の問いをヴィッセルト・ホーフもアスムッセンに投げかけていた<sup>3</sup>。すでにわれわれもシュトゥットガルト罪責宣言発表直後からの争論に言及したが<sup>4</sup>、ヴルム監督、ニーメラーなど、シュトゥットガルト罪責宣言の成立に関与し戦後ドイツ教会の再出発をリードした人に揺るぎはなかったものの、戦争における相手国の罪責の有無また教会の政治的発言の是非などをめぐってドイツ教会の隅々までシュトゥットガルトが支持されたとは言えなかった。1947年になると罪責の論議そのものが下火になる。すでに東西の冷戦の問題が浮上していた。シュトゥットガルト罪責宣言が他国の教会により受け入れられることによって世界教会協議会(WCC)の創立大会(アムステルダム)が可能となったのは間違いない。同時に1948年夏に開催された大会には東西冷戦の影がすでに差し込んでいた<sup>5</sup>。

## 2) アムステルダムへ向けて

世界教会協議会の第一回大会は五大陸、世界44ヶ国から、147の教会(教派)の代議員(Delegates)351人、代理人(Alternates)238人、顧問(Consultants)、友愛代議員(Fraternal Delegates)、オブザーバー(Observers)、一般参加者(Accredited Visitors)、青年代議員(Youth Delegates)など、総勢1500人が参加して、1948年8月22日から9月4日まで、2週間にわたり、オランダの首都アムステルダムで開催された<sup>6</sup>。カトリック教会にもオブザーバー参加の招待状が送られたが全体として加わるには至らなかった。古カトリック教会からの参加があった。アレキサンドリア、アンティオキア、コンスタンティノポリス、エルサレムの正教会、ギリシヤ正教会、米国正教会などは参加したが、モスクワの影響下にある正教会からの参加はなかった。

大会開催へと大きく歩み出したのは1946年2月にジュネーヴで開かれた戦後最初の暫定委員会であった。同委員会はここで大会を「神の秩序と人間の現在の無秩序」を主題に

<sup>2</sup> Ibid., S.306.

<sup>3</sup> A. Boyens, *Kirchenkampf und Ökumene 1939-45*, 1973, S.283.

<sup>4</sup> 拙稿「カール・バルトのエキュメニカルな神学への道」(3):『人文学と神学』第10号, 51頁以下, 2016年。

<sup>5</sup> M. Greschat, *ibid.*, S.311.

<sup>6</sup> Cf., W.A. Visseer't Hooft (ed.), *The First Assembly of the World Council of Churches. The Official Report*, 1949.

1948年夏開催することを決定し、その具体的な準備を研究部門の委員会にゆだねた<sup>7</sup>。研

<sup>7</sup> この暫定委員会は、エキュメニカル研究所創設計画の承認、IMCを通しての若い教会との関係強化、難民や強制的に追放された人々に関する対策・施策など、あらゆる点で戦後の再出発を画した会議であった。新しい組織づくりもなされ、カンタベリー大主教、ウプサラ大主教、ゲルマノス大主教、マーク・ベグナー、ジョン・R・モットの五人が共同議長（President）に選出された。Cf., WCC (ed.), *The Ten Formative Years 1938-1948, Report on the activities of the World Council of Churches during its period of formation, 1948. The World Council of Churches: Its Process of Formation, minutes and reports of the meeting of the Provisional Committee of the WCC, Geneva, 1946.* 総幹事フィセルト・ホーフトは次のように回顧している。「1946年2月世界教会協議会の暫定委員会はジュネーブで戦後最初の会議を開催することができた。1939年以来全員が集まっていた委員会は開かれていなかった。われわれすべての委員は再会を待ち望んでいた。しかし何年にもわたって離ればなれになっていて非常に違った経験をした後ではわれわれは相互理解という点でどんな問題に直面することになるのだろうかと思いを巡らしてもいた。しかし会議はわれわれがこれまででもった中でも一番和気あいあいとしたものであった。われわれがみなそれぞれ全く異なった環境の中にありながら同一の諸現実にも固執しようとしたということ、とり分けキリストにおいてわれわれが一つであるという現実に固執しようとしたことを見出したことは喜びであり、われわれは何の困難もなしに即座にお互いに理解し合ったのである。ベルグラーフ監督は皆のスポークスマンとして聖ペトロ大聖堂における説教で次のように語った、

『ここで私が告白しなければならないのは、今日キリスト教世界の異なったあらゆる部門から来る友人たちと出会うことはどういうことになるのであろうかと心配しながら思い巡らしていたということです。驚きは、ともかく私にとっては、驚きが存在しなかったということです。それは全く当然のことでした。当然だったというのは、この五年の間、私たちが外部世界とコミュニケーションをとっていたときにそうであった以上にもっと親密に共に生きたからにはほかなりません。もっとわれわれは一緒に祈りましたし、もっとわれわれは一緒に神の言葉に耳を傾けました。われわれの心は共にありました。今日ここで、ベグナー、カンタベリー〔大司教〕、チチェスター〔大司教〕、インド人、中国人たちとお会いすることに何の不思議もありません。それはわれわれがすでに知っていたことの現れであって、神の諸教会の普遍的な交わりはもはや弱くなく、むしろ神によって確立されており、またこの交わりを通して戦争の経験は今も生きており有効に働いているのです。世界のキリスト者の交わりが手探りの試みであった時代は過ぎ去りました。戦争の中でキリストはわれわれに、私のキリスト者たちよ、君たちは一つだと語りたまいました。神は感謝すべきかな、平和条約締結の後に生ける交わりが当然のものだと受け取られようというのは世の中では決して普通のことではないのです』。

会議に一つの影を落としていたのは決定的な貢献をなしたであろう幾人かの人がわれわれと一緒にいないということであった。われわれはウィリアム・テンブル、ウィリアム・ペイトン、ウィリアム・アダム・ブラウン、ディートリヒ・ボンハッフアーたちが会議にもたらしたであろうことを思い巡らした。しかし何人かの初期の開拓者たちがいた。ジョン・R・モット、もう80歳を越えていたが、若い教会を世界協議会に加わってもらうために精力的に働いていた。ゲルマノス大主教とアリビザトス教授、二人は正教会が〔世界教会〕運動で完全な場所を占めるようになるために粘り強く努力していた。チチェスターのジョージ・ベル、彼は会議を1919年の第一次大戦後の最初の会議と比較することができた。彼はまた、ドイツのキリスト者たちとエキュメニカル運動との間の交わりの維持に自ら深く関わっていたがゆえに今回罪責問題がわれわれを引き裂かなかったことで特別の喜びに満たされていた。戦時中世界協議会を維持するために助力した他の人びともいた。権威とユーモアを併せもったまれな人格で会議を主宰したマルク・ベグナー。分離の歲月〔暫定〕委員会を代表し世界協議会の独立を主張したアルフォンス・ケヒリン。ナチズムに対する教会の抵抗の旗手となった人たちもいた。やせたように見えた強制収容所に拘留されていたマルティン・ニーメラー、ドイツの《沈黙》の教会の一つの声となったヴルム監督、預言的証しによる教会革新運動の首唱者オランダのヘンドリック・クレーマー、ノルウェー教会の霊的な独立のための格闘のリーダーであるベルグラーフ監督。決して会うことのなかった、しかし互いに深く関心を寄せ合っていたベルグラーフとニーメラーとが私の部屋で握手を交わしたのは偉大な瞬間であった。……

究委員会は同年8月ケンブリッジで準備過程の詳細を決め、二年半にわたり精力的に準備に当たった。「巧みに組織化された準備」<sup>8</sup>として後にバルトも評価した大会の準備過程について、ここではわれわれはバルトに関連するかぎりで行ったいくつかのことを記すに止めなければならない。

一つは、ケンブリッジでの研究委員会において大会の主題が「人間の無秩序と神の救済計画」と改められ、この主題追求のため四つの部門または分科会 (Sections) が設けられたこと、そしてバルトはその第一分科会に属することになったことである<sup>9</sup>。第一分科会には他に、グスタフ・アウレン (議長)、クレアランス・T・クレイグ (副議長)、オリヴァー・S・トムキンス (書記)、ゲオルギ・フロロフスキー、リチャード・ニーバー、レギン・ブレンターなど総勢20人がメンバーとして名を連ねた。第一分科会のテーマは「神の救済計画における普遍的教会」。他の部門のテーマは、第二分科会「神の救済計画への教会の証し」、第三分科会「教会と社会の無秩序」、第四分科会「教会と国際的な無秩序」である。これら各分科会はそれぞれに、第一分科会は「信仰と職制」、第二分科会は国際宣教協議会 (IMC)、第三分科会は「信仰と生活」、第四分科会は新たに創設された国際問題教会委員会 (CCIA)<sup>10</sup>の問題領域を包含するものとして設けられた。各分科会は1946年から

---

会議に提出した私のレポートで私は過去にはただ短く触れたにすぎない。私はこう述べた、『戦争中〔世界教会〕協議会との緊密な関わりという特権をもっていた人たちにとってこれらの歳月はエキュメニカルな仕事が霊的に容易で単純な時代としていつも目立ったものであるであろう、なぜなら、技術的には大変な困難があったにもかかわらず、前進命令はきわめてはっきりしており信仰を守ろうとする人たちの基本的な一致が深く感じられたからである』。戦争中に世界教会協議会の加盟教会のリストに50の教会が増えたことを私は強調した。今やわれわれの仕事は、まだ答えをもらっていない教会の完全な参加を確実なものとするのであった。私はロシア正教会の代表とWCCとの間で会合をもつ準備をし、それゆえにギリシャ語を使う教会に代表を送るべきではないかという問題を提起した。事前のさまざまな論議に基づいて私は最初の大会を1948年に開くように提案したのである」(Visser't Hooft, *Memoirs*, 1973, pp. 195.)。

<sup>8</sup> Barth, *Eindrücke von Amsterdam 1948*, in: *Amsterdamer Fragen und Antworten*, TEH, NF 15, 1949, S.20.; *Ders.*, *Die Unordnung der Welt und Gottes Heilsplan*, in: *Ibid.*, S.3.

<sup>9</sup> オリヴァー・S・トムキンスは1946年10月24日付の書簡でバルトに第一分科会のメンバーに加わり準備研究に助力する用意があるか暫定委員会の名で問い合わせた。その際彼は大会の研究テーマに関する協議記録を同封したほか、第一分科会の予定メンバー表や研究計画、執筆担当者などの概要を添付した(Vgl., Barth-Visser't Hooft Briefwechsel 1930-1968 [GA V], S.220, Anm.6.)。これによってバルトは自分が第一分科会でアウレンやフロロフスキー、「もう一人のアメリカ人」[クレアランス・T・クレイグのこと]と4人で教会のベーシック・ドクトリンに関して研究論文を執筆するよう期待されていることを知った (Ibid., S.219.)。

<sup>10</sup> 「国際問題教会委員会」(Commission of the Churches on International Affairs)の創設はすでに1946年2月の暫定委員会で決められていた。これを立ち上げることは焦眉の課題の一つであったが、ようやく同年8月初頭、ケンブリッジで、「アメリカ連邦教会協議会正義と永続平和に関する委員会」議長ジョン・フォスター・ダレスの議長のもとで同委員会と世界教会協議会と国際宣教協議会から参加して開かれた会議をへて、世界教会協議会と国際宣教協議会の共同委員会として創設された。会議の書記をつとめたフィセルト・ホーフトによれば、「会議の参加者の20人ほどが信徒であった

48年にかけて数度の会議を開催し最終的に4巻の準備文書をまとめ上げたほかに、本大会直前にも（1948年8月18～22日）ユトレヒトのヴォウドショーテンで準備を重ねた。この第一分科会の研究のためにバルトが寄せた論稿が、次項で取り上げられる『活ける主の活ける教会』である。

準備段階のことでもう一つ付け加えておかなければならないのは、暫定委員会が研究部門に対し、とくに第三と第四部門の活動を基礎づけるためこの年「今日における教会の社会的・政治的メッセージのための聖書の権威」を研究するように指示したことである。研究部門の委員会はこの主題に関わる2回の準備研究会を開催し<sup>11</sup>、それらの報告を含む『聖書から現代世界へ』を出版した。その2回目、1947年1月5～9日、第1回と同じ主題でボッセで開催された準備研究会にバルトは参加し、そこで語ったのが、これも次項で取り上げられる『聖書の権威と意義』である。8人の講演者の中にバルトとも親しくなっていたスウェーデンのルター派の神学者A・ニグレンもいて豊かなエキュメニカルな対話が展開された<sup>12</sup>。

三つ目は、大会の開会講演の依頼をバルトが引き受けたことである。準備会議への参加がすでにエキュメニカル運動に対する彼の従来の批判的立場からすれば驚き以外の何ものでもなかったが、開会講演にバルトが登場することはいっそうの驚きをもって迎えらるることになった。バルトに依頼することを提案したのは——フィセルト・ホーフトが折に触れ言及するように<sup>13</sup>——研究部門の責任者ヴァン・ドューセンであったが、じっさいこれを強力に推進したのはフィセルト・ホーフトにほかならなかった。バルトが講演の招請を受け取ったのは1948年1月。後述するような準備段階での協議会への疑義や論文掲載の行き違いなども重なり<sup>14</sup>、彼ははじめ引き受ける意志を示さなかった。しかし同月末バルトは、大会準備会からの帰途ジュネーヴの受諾要請を携えてバーゼルに立ち寄ったフロマートカを迎えたほか、訪問した第一分科会議長アウレンからジュネーヴからの要請を改めて聞くことになった。さらにオランダのS・H・F・ベルケルバッハなどの説得なども

---

ことは重要なことであった」という。「というのも会議は何か敬虔な言葉や完全な忠言などではなくキリスト教信仰から生まれかつ同時に国際関係の現実の全体的な知識に基づく具体的な提案・勧告を目指そうとしたから」(W.A. Visser't Hooft, *Memoirs*, 1973, p. 199)。

<sup>11</sup> 第1回は、1946年8月10日～12日、ロンドンで開催された。C・H・ドッドをはじめとして6人の講演と協議が行われた。

<sup>12</sup> W.A. Visser't Hooft, *Karl Barth und die Ökumenische Bewegung*, in: *EvTh* 40, 1980, S.15. 参照、ブッシュ『カール・バルトの生涯』(小川訳) 484頁。

<sup>13</sup> フィセルト・ホーフトのバルト宛て1948年2月5日書簡。Ibid., *Briefwechsel*, S.225.; *Visser't Hooft, Memoirs*, p. 205.; *Ders., Karl Barth und der ökumenische Bewegung*, S.15.

<sup>14</sup> 本稿9頁および注22を見よ。

あり開会講演を受諾した<sup>15</sup>。

### c. 1947年の二つの貢献

#### 1) 『聖書の権威と意義』

大会に向けた第2回目の準備会議(1947年1月5-9日、ボセイ)でなされたこの講演を理解するためには、何よりも前項で述べた二点に留意しておくことが必要であろう。一つは、講演は、「今日における教会の社会的・政治的メッセージのための聖書の権威」を研究するようという暫定委員会の要求を十分意識してなされているということであり、もう一つは、諸教会のエキュメニカルな一致が講演の大きな目標ないし一つの枠となっているということである。前者に関連してこの講演では、中間時を歩む教会の「世界」ないし「この世」に対する宣教の課題に一貫して目が向けられていることを重要な特徴として指摘してよいであろうし、後者の問題は本講演の最終項目で論題として取り上げられる。さらに内容全体に関して付け加えれば、講演の神学的洞察の基本は、バルトがすでに公にしていた『教会教義学』のプロレゴメナ(KDI/2, 1938)の聖書論と選びの教説(KDII/2, 1942)のイスラエル神学によって構成されているとすることができるであろう。

バルトは講演を「『聖書の権威と意義』が内実豊かなものとなるのは、その命題が、分析命題として、あらゆる疑わしさを免れているような或る事態を言い換えている場合、それゆえ、この事態に関する知識を前提としている場合である」<sup>16</sup>という命題をかかげて始める<sup>17</sup>。この事態とは「聖書は、イエス・キリストの教会においては、或る特定の権威と意義とを持っている」という「それ自身において基礎づけられている」聖書と教会との間の事実的関係のことにほかならない(命題1〔以下数字のみ記す〕)。こうした理解に立ちバルトは、第一に、イエス・キリストと聖書との関係(2~4)を、次いで聖書と教会の宣教との関係(5~12)を明らかにしていく。この最後の部分(12)で聖書の権威と諸教派のエキュメニカルな一致との関係に説き及ぶ。

バルトによれば、聖書とは、イエス・キリストとの関係で言えば、「選ばれ召された彼の預言者たちと使徒たちとの証言」として「イエス・キリストの現臨と支配」の「顕わな

<sup>15</sup> バルトのフィセルト・ホーフ宛て1948年2月7日付書簡。Ibid., Briefwechsel, S.226f. フィセルト・ホーフは大会へのバルトの積極的関与について次のように述べている。「おそらくこうした決断の主な理由は、何人かの彼の友人や学生たちがエキュメニカル運動の教会指導者あるいは協力者として今や先頭に立ち、彼らを孤立させたくないということにあったのであろう」(W.A. Visser't Hooft, Karl Barth und die Ökumenische Bewegung, ibid., S.14)。

<sup>16</sup> Barth, Die Autorität und Bedeutung der Bibel, in: Die Schrift und die Kirche (Theologische Studien 22), S.3. 山本和訳(カール・バルト著作集), 天野有訳(バルト・セレクション1)。

<sup>17</sup> Vgl., KDI/2, S.595.

形態」である(1)。これらの証言は「みな、同一の中心、対象、内容」を持っている。そしてそれはまさにイエス・キリストにほかならない<sup>18</sup>。むしろそのことは証言の「それぞれの仕方」や「それぞれの場所」の多様性を排除しない。しかしバルトによれば旧約と新約とは、それぞれ、ヤハウエとそのイスラエルについての証言として、また一人のイエス・キリストと彼に属する者たちについての証言として、「恵み深い神が罪深い人間と出会ったもうこの出会いにおいて、出来事<sup>19</sup>が、業が、すなわち、創られた万物の中心を成しており、万物の始源と終極、神の創造のうちにある万物の起源と新しい創造のうちにあるその目標の秘義でもあるところの業が生起した」という点で一致している。聖書がイエス・キリストを証しているというのはそうした出会いこそが「その被造物に関する神の決定と意志であり、時間の中でのあらゆる<sup>サイン</sup>存在の意味である」ということを語っているのである。この証言の対象の「唯一無比」性に神の言葉としての聖書の規範性は基づき、教会は聖書正典を確定したのである(以上2～4)<sup>20</sup>。次に聖書と教会、ないし広い意味で教会の宣教との関係についてバルトは語り始める。基本認識は次のように示される、「これらの人間の証言は、それが、復活しそして再び来たりつつあるイエス・キリストの名において、事実、教会を召喚し慰め諭し、それによって、世に向けての教会の宣教に、事実、自由と方向と充溢とを——一つの最初にして最後の言葉という性格を——与えることによって神の言葉として証明される」(5)。簡単に言えばそれは、罪深い人間に対する恵みの神に関する証言としての聖書は教会を生み出し建てるということにほかならない<sup>21</sup>。人々は神の言葉に傾聴し服従し自ら「御言葉の使者」とされる。これら「すべてが起ることによって、たしかにキリスト教会は成立し、存在し、存続する。そして、これらすべてが事実生起するという、教会が成り、教会として生きることが許されるということ、そのことが聖霊の証しであり聖書の権威の自己証明である」。その際教会は神の言葉としての聖書証言の人間性に対応した「人間による積義」を求められ、その奉仕を果たさなければならない<sup>22</sup>。そうでなければ教会は教会であることができない。かくてバルトが聖書と教会の宣教との関連で第1に取り上げたのは聖書積義の問題であった(6～7)。2番目の問題として聖書と「教会の生活」ならびに「世への教会の宣教」との関係が取り上げられている。

<sup>18</sup> 「預言者的－使徒的言葉は、イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教である」(KDI/1, S.110)。Vgl., KDI/2, S. 534. KDII/2, S.218.

<sup>19</sup> 本稿 12 頁を見よ。

<sup>20</sup> Vgl., KDI/2, S.524-532.

<sup>21</sup> Vgl., KDI/2, S.768-779.

<sup>22</sup> Vgl., KDI/2, S.796-830.



聖書証言が権威をもって存在していることこそ、罪深い人間と恵み深い神との出会いの「救いに満ちた保証」である。したがって聖書証言を教会の教職権の下位に従属させるローマ教会の道も、一般的な敬虔意識を優越させる新プロテスタンティズムの道も共に神と人間との出会いを保証するものとはならないのである(8)。3番目(そして最後)に、「教会は」そのすべての奉仕<sup>ミニストリー</sup>において、すなわち「その全生活、その秩序とその礼拝、その信仰告白とその教え、その説教とその教育、かくしてまた諸国民と諸国家の中での生におけるその諸々の態度決定といったことへの責任を、最後決定的には聖書証言に負っていること、あらゆる保持と刷新との源泉と規範としての聖書証言に、いついかなる時にも場所を空けることを承認する」(9)。こうしたことが聖書証言の権威の「実践的意義」ということになる。この聖書証言の権威という問題は「教会と教会の世への委託」(10)にも「神学とその教会における奉仕」(11)にも、そして「諸教派と諸教派の神学者たちのエキュメニカルな一致」(12)にも決定的な仕方で関係するのである。

さてこの最後のところをもう少しはっきりさせておきたい。聖書証言の権威と諸教派のエキュメニカルな一致とはどのように関連するのであろうか。バルトの基本的な確信によれば、教会(教派)の一致の問題も聖書証言の権威の問題と切り離されて考えられてはならない。それゆえ「キリスト教諸教派のエキュメニカルな一致は…こうして規定された聖書の権威が諸教派にとって効力を発揮しているのか、それとも発揮していないのか、というまさにその程度に応じて、真実であるか、それとも幻想であるか、そのいずれかである」(12)ということになる。こうした聖書の権威のエキュメニカルな承認に立ってはじめてわれわれは、バルトによれば、「聖書の社会的・政治的使信について実り豊かな仕方で共通に問う、ということもまた、起こるにちがいないし起こりうるし起こるのであろう」(12)。

このボセイにおける2回目の準備研究会に関してなお一つ、会議が最後にまとめた「総括テーゼ」<sup>23</sup>を巡って付け加えておきたい。バルトを含む8人の講演を受けての協議は活

<sup>23</sup> 総括テーゼ: 「1, 神は、永遠の御言葉であるキリストにおいて世界をつくり、甦り高く挙げられた方としての彼においてこれを統治したもう。2, 神は肉となったキリストにおいて神から墮落した世界をご自分と和解させたもうた。彼によって新しい時<sup>アイオン</sup>は始まった——彼を信じるすべての人のための罪と悪魔からの救いと共に始まった。しかし古い時<sup>アイオン</sup>は最後の審判においてはじめて止揚される。そしてそのときまで信仰者はあらゆる悪の諸力との継続的闘いの中で生きる。3, この時の中にあって救いはただキリストのからだとしての教会にだけ与えられている。しかし神はたんに教会においてだけ働きたもうのではない、そうではなくて全世界をキリストにおいて保持し、この世の諸力をも、これら諸力がそれを知らないところでもご自身への奉仕につかさせたもう。4, 教会は神の言葉に基づいて、すなわち教会がそれを旧新約聖書からのみ聞くままに、キリストは全世界の支配者であると宣べ伝える。そして教会は、すべての人間に、また教会が絶えず執り成しの祈りをささげなければならない国家にも、神の義務づける掟を指し示し、一切の不正を神の言葉によって罰する権利と義務とを有している。5, 教会はまた、その肢々に、その職業生活を含み彼らの全生活に

発になされたが、神学的な立場の違いが一致への進展を妨げることにもなった<sup>24</sup>。とくにバルトとニグレンの対話は一方で建設的な実りをもたらしたが、「キリストの王的支配」の理解をめぐってなお議論が必要と判断した会議は、すでに一致している点についてはっきりさせ、その上での議論の深まりを期待してテーゼとしてまとめ上げた<sup>25</sup>。ところでバルトは所用のためテーゼを巡る協議には参加せず帰宅、彼の不在のもとでそれは成立した<sup>26</sup>。数日後アイヒロットから送り届けられたボセーのテーゼを見たバルトはただちにフィセルト・ホーフトにかなり強い調子で理解できない旨書き送った。「それは私には余りに曖昧なものです。もし私がそこにいたら、われわれが何で一致し、何で一致しなかったか、同じ明瞭さで述べるように提案したでしょうに」<sup>27</sup>。とりわけ、ヘルヴィクも指摘するように、たとえば総括テーゼの3番目など、たとえば『バルメン神学宣言』第二項に見られるキリストの主権ないしその王的支配理解に関する改革派の立場から見ればまさしく「曖昧」な妥協と見えたのであろう<sup>28</sup>。フィセルト・ホーフトは返信の中で、これらのテーゼはわれわれがようやくここまで来た、ここからさらに進まなければならないということであって、決して共同の信仰告白のようなものと見なされるべきではないと書きつつ、ともかくバルトがそこに参加してくれたことが自分にとっての「大きな喜び」であり、これからも協力し労苦を共にしてほしい希望を書き記した<sup>29</sup>。

## 2) 『<sup>キルヒエ</sup>教会——<sup>ゲマインデ</sup>活ける主の活ける教会』

バルトが第一分科会の委員を引き受けたことはすでに述べた。この分科会の準備協議会のために提出されたのが『<sup>キルヒエ</sup>教会——<sup>ゲマインデ</sup>活ける主の活ける教会』である<sup>30</sup>。バルトは「教会のペー

---

対するキリスト支配の意義をはっきりと自覚するようにさせる特別の義務を負っている。6. 教会は、教会の主の愛の命令に従い、また主の霊の力において、世界に対するまた世界に関する宣教を、他のすべての課題と同様に果たさなければならない。その場合教会は、律法と預言者によって証しされ、イエスの言葉においてまた彼の使徒の戒めにおいてその最後の到達距離にまで明らかにされるようにイスラエルにおける神の御心の実際的実現についての聖書証言に服従しつつ耳を傾けなければならない。7. それゆえ教会は、こうした教えの課題を果たす中で、新約からイスラエルの旧約の秩序へとこの道を進む。それはその中心がキリストである全聖書から、人間の生活形成をその聖書的特徴においてつかみとり、したがって共同生活の構造と規定を解明するためである。

<sup>24</sup> Vgl., *Die Studienabteilung der Oekumenischen Rates der Kirchen* (hg.), *Der Weg von der Bibel zur Welt*, 1948, S.119-169.

<sup>25</sup> *Ibid.*, S.165-169. Vgl., *W.A. Visser't Hooft, Karl Barth und die Ökumenische Bewegung*, *ibid.*, S.15

<sup>26</sup> バルトは彼のパーゼルの前任者 J・ヴェントラントの葬儀のためテーゼの協議の前に退出した。

<sup>27</sup> *Ibid.*, *Briefwechsel*, S.212.

<sup>28</sup> Vgl., *H. Herwig*, *ibid.*, S.144-146.

<sup>29</sup> *Ibid.*, *Briefwechsel*, S.213f.

<sup>30</sup> これには二つのテキストがある。事情は以下の通り。バルトは1947年1月に開催された大会の最初の準備会議（ボセー）から帰ると、トムキンスから第一分科会の原稿を折り返し送るようにとの要請と共に、第2回の四分科会合同の準備会議（1947年6月、ボセー）の正式招請状を受け取った。

シック・ドクトリン」の研究という第一分科会のテーマに対するものとして本論文を用意した<sup>31</sup>。これは彼ののちの成熟した教会論（『和解論』で展開された教会論）に通じており、彼はここでその核心を展開しつつそれを徹底することによってアングロサクソンの教会理解との出会いを果たし、彼の教会理解のエキュメニカルな特質を提示した。その場合重要な役割をになうこととなったのは教会を表すゲマインデ (Gemeinde) という言葉であった。われわれは以下内容を簡単にたどった上で、彼がいかなる道を通して教会論におけるエキュメニカルな基礎的一致に至ろうとしているかを辿ってみたい<sup>32</sup>。

この論文でバルトは教会を「活ける主イエス・キリストの活ける教会」<sup>33</sup>として規定し、ただこの規定に基づいて、教会理解の諸要素、すなわち「教会の本質や一致、教会の秩序や課題、教会の内的生活やこの世での教会の委託」<sup>34</sup>などを理解しようとした。全部で三分節からなる。

- 1, 教会の存在
- 2, 教会に対する脅威
- 3, 教会の革新

はじめに「教会の存在」について——バルトによれば、「教会はイエス・キリストに由

4月1日にバルトは原稿を送った。これが第一のテキストである (ThEx NF9, 1947; ThSt (B) 22, 1947)。しかしこの論稿が報告書では短縮された形で独立した文書として後ろのほうに配置され、「教義学的諸前提が問題である」べき本来の第一分科会報告の箇所にはM・ラムゼーの論稿が印刷されていることをバルトは9月になってはじめて知った——夏学期ポンの客員教授の仕事で6月の第2回の準備会議にも同月のエッセルティースの、バルトの論文が取り上げられた第一分科会の非公開会議にも交通その他の理由もあって参加できなかった。10月、バルトは、同一表題の自ら短縮した論稿を、何があったのか事情を明らかにするようにというトムキンスに対する願いを付してジュネーブにおくった（これが第二のテキスト）。トムキンスは特別な神学的理由があったわけではないと釈明しつつ準備文書では最初の組織神学的考察の部分に入れることが適当だという判断を示した。ÖRK, *Studienabteilung* (hg.), *Die Unordnung der Welt und Gottes Heilsplan*, Bd.1, *Die Kirche in Gottes Heilsplan*, Zürich 1948, S.71-79. 英語版では p. 67-76.

<sup>31</sup> バルトは戦後のドイツの教会を振り返ってこう書いている、「それにもかかわらず驚いたことには、私は教会のなかに、破滅に急ぎつつあった1933年当時と同じ構造、党派、支配的傾向を見出した。……私が見出したのは、州教会の組織維持にたいする相も変わらぬ関心——あらゆる新奇なものへの興味によってよりよい結果をもたらすということのない——であり、なかんずく公然たる信条主義や教権主義、およびいろいろ賑やかな姿で現れている典礼主義への興味によってよび起こされた関心であった」(『バルト自伝』佐藤敏夫訳, 82-83頁)。こうした状況を背景に彼は本論文によって教会の最も基礎にあるべき共通理解、すなわち教会のキリスト論的理解に立ち返って真実の教会の姿を明らかにしようとした。

<sup>32</sup> 本講演は1947年6月にプファルツの神学研究会でもなされ (Vgl., *Barth, Predigten 1935-1952*, S.353, Anm.2), さらに7月にはダルムシュタットで開催された兄弟評議員会の会議でも語られた。周知のようにこの会議をきっかけのちにダルムシュタット宣言が生み出された (Vgl., *Klaus Hoffmann, Die große ökumenische Wegweisung*, 2004, S.177)。

<sup>33</sup> *Barth, Die Kirche—die lebendige Gemeinde des lebendigen Herrn Jesus Christus*, ThSt (B) 22, S.21ff.

<sup>34</sup> *Ibid.*

来し彼と共にではあるが、彼とまったく違った在り方で、この地上に、この中間時に、世俗史のただ中に」<sup>35</sup>存在する。重要なことはバルトがその「存在」を「出来事」として理解することである（「教会という概念は動的な現実を言い表す概念である」<sup>36</sup>）。それはどのような出来事であろうか。それは「神と人間の間の特別な出来事（*Geschichte*）」であって、「この出来事の中で、神が特定の人間たちを、神の友として、イエス・キリストにおいてすでに起こったご自身とのこの世の和解の証人として、ご自身によってすでに獲得された罪・苦しみ・死に対する勝利の告知者として、全被造物に対する創造者の激しい愛の布告である来るべきその啓示の先触れとして、生かしたもうということが起こる。神がそのような使命のもとに、またそのような性格をもって生かしたもう人間たちの集団である」<sup>37</sup>。教会はそのような集団が集められるということが起こるときに存在するのである。「教会は、そのような集合（*Versammlung*）という出来事である」<sup>38</sup>。こうした理解に立つバルトにとって、教会を表わす *Gemeinde* という言葉は重要であった。彼はルターが *Kirche* という言葉をまったく放棄して *Gemeinde* で置き換えることを考えていたということを引き合いに出し、*ecclesia* というギリシャ語由来のラテン語が含み持っていた意味を生かすものとして *Gemeinde* (*congregatio*) の語の使用を推奨した。バルトにとって、教会について何を語る時でも、つねに、教会はゲマインデであるということ、集合という出来事であるということから考えられなければならない。ところで教会を *Gemeinde* と呼ぶとき、バルトにおいて重要なのは、第一に人間の集団、交わりのことではなかった。次のように言われる、「『教会』という言葉は、イエス・キリストの……主権を指し示さなければならず、まさにそれゆえに……自由な——イエス・キリストに対しても自由であり、そのすべての成員互いの関係においても自由な——<sup>ゲマインデ</sup>集団を、指し示さなければならない」<sup>39</sup>。教会を *Gemeinde* として理解する場合も、いやその時こそ、バルトにとって第一に問題であったのはキリストの主権であった。バルトのこれからの議論のために記憶しておきたい。

次に「教会に対する脅威」——教会は主イエス・キリストに由来し、彼と共に、しかし彼とまったく違った在り方で、「この地上に、この中間時に、世俗史のただ中に」生きるものであった。したがって教会は「神的本性と特性を持つ」<sup>40</sup> と共にまた「人間的本性と

<sup>35</sup> Ibid., S.27.

<sup>36</sup> Ibid., S.22.

<sup>37</sup> Ibid.

<sup>38</sup> Ibid.

<sup>39</sup> Ibid., S.23. 傍点は筆者。

<sup>40</sup> Ibid., S.27.

特性を持つ<sup>41</sup>存在であり、そのかぎり教会は「被造物的現実の一要素であり、したがって脅威の下にある現実の一要素」<sup>42</sup>である。この脅威は、じっさいにはいつも「試練」<sup>43</sup>となって教会を脅かす。そうした脅威と試練の諸形態としてバルトがここで上げる、たとえばキリスト以外の「他のところも見ている」いわば「藪睨み」の教会<sup>44</sup>は、後に「他者従属下」の教会、あるいは「世俗化」した教会として、また「自分で作った宗教的幻想という特別の世界」にいる「盲目の教会」<sup>45</sup>は「宗教化」した教会として折に触れ論難されることになる<sup>46</sup>。いずれにせよそこではもはや「主と主の教会の間の生命の回路」<sup>47</sup>は断たれていて、あの特別の「出来事」、すなわち、神と人間の出会いと集合の出来事は起こらない。教会は教会であることをやめる。「死せる教会」<sup>ゲマインデ</sup>、いやむしろ教会のようなもの、教会のように見えるもの、すなわち「仮象の教会」(Scheinkirche)とも言うべきものが現れ出る<sup>48</sup>。

この関連においてバルトは教会の一致の問題に言及する。つまり、そうした多くの死せる教会・仮象の教会が存在していることを暗示し、その徴となるのが、教会の一致が疑わしいという事実である、と。というのも教会の一致についてバルトはこう考えているからである、「ただ一人の活ける主イエス・キリストに基づいて、ただ一つの活けるキリスト教会<sup>ゲマインデ</sup>がありうるだけである。すなわち、それぞれの差違を持ちながらも、このただ一つの教会の様々な違った形態としての、個々のキリスト教会<sup>ゲマインデ</sup>とすべてのそれら教会のグループ<sup>ゲマインデ</sup>があるだけである。そして、そのような様々な形態の一つ一つは、他の形態の一つ一つの中に、自分自身を認識し、自分自身の中に、逆に他の一つ一つの形態を認識するのである」<sup>49</sup>。教会は「活ける主イエス・キリストの活ける教会」であることにおいて一つである。「教会の一致のただ一つの保証」<sup>50</sup>とは「神の言葉と人間の応答という出来事における教会の存在」<sup>51</sup>、あるいは「活ける主との結合という中断されない回路における教会の存在」<sup>52</sup>で

<sup>41</sup> Ibid.

<sup>42</sup> Ibid., S.27.

<sup>43</sup> Ibid., S.28.

<sup>44</sup> Ibid., S.30.

<sup>45</sup> Ibid.

<sup>46</sup> 拙著『カール・バルトの教会論』2015年、285頁以下、参照せよ。

<sup>47</sup> Ibid., S.32.

<sup>48</sup> ハンガリー講演(1948年3~4月)の一つ『実在の教会』(Die wirkliche Kirche)を参照せよ(井上訳、カール・バルト戦後神学論集所収)。Vgl., KDIV/2, 67節。並びに拙著、前掲書、280頁、参照せよ。

<sup>49</sup> Barth, Die Kirche—die lebendige Gemeinde des lebendigen Herrn Jesus Christus, ThSt (B) 22, S.33.

<sup>50</sup> Ibid.

<sup>51</sup> Ibid.

<sup>52</sup> Ibid.

ある——われわれはここにバルトの考える教会の一致の基本の考え方を確認してよいであろう。したがって教会の一致を問うことは、脅威と試練の下にある教会の保持と革新を問うことでなければならない。

最後に「教会の革新」について——バルトによれば「教会の保持、それゆえ革新、それゆえ<sup>レフォルマチオン</sup>改革はただ教会の活ける主イエス・キリストからしか由来しえない」<sup>53</sup>。教会は「キリスト者の善意や敬虔や理想」に希望を置くことはできず、「彼、主が教会の希望である」<sup>54</sup>。この希望に対応する教会の「秩序」とは、したがって、活ける主による<sup>ゲマインデ</sup>教会の革新に対し考え得るかぎり最小の抵抗をするようなものでなければならないし、活ける主による改革に人間の側で最大限の開放性と用意と自由を示すようなものでなければならない<sup>55</sup>。要するに、その秩序によって「一にして聖なる公同の使徒的教会」が「可視的教会」(*sichtbare Gemeinde*)として現実存在するものでなければならない。教会は不可視の「プラトンの共同体」(*civitas Platonica*)として在るのではないし、「自分の恣意で一つの<sup>ゲマインデ</sup>教会へと集まる個人、あるいはその多数として」現実存在するのでもない。また教会は「様々のいわゆる職位によって——その職位という言葉で牧師職を理解しようと長老職を理解しようと——<sup>ゲマインデ</sup>教会に対して、それとは離れてイエス・キリストを代表するものとして現実存在するのでもなく、イエス・キリストに対して、彼とは離れて<sup>ゲマインデ</sup>教会を代表するものとして現実存在するのでもない」<sup>56</sup>。イエス・キリストと<sup>ゲマインデ</sup>教会とのそうしたいわば「間接的」な関わりは、バルトによればマタイ 20・25～26 の原則に反する。むしろ教会は「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所に」(マタイ 18・20) 現実存在する。要は、「<sup>ゲマインデ</sup>教会という観念や概念に基づかずに作り出された教会秩序は、その名に値しない」<sup>57</sup> ということである。

<sup>ゲマインデ</sup>教会という言葉でバルトは、具体的な個々の<sup>ゲマインデ</sup>教会、すなわち「定期的に礼拝を守るという可能性によって構成された地域的教会 (*Ortsgemeinde*)」のことを基本的に考えていた。「キリスト<sup>ゲマインデ</sup>教会は、礼拝に基づき礼拝を目指して形成され、実現され、礼拝の中に生きる。またキリスト<sup>ゲマインデ</sup>教会の成員は、この礼拝において互いに仕え合い、共に主に仕え、さらにその証しによって世にも仕える」<sup>58</sup>。そしてそのような「様々の奉仕が引き受けられることに

<sup>53</sup> Ibid., S.35.

<sup>54</sup> Ibid.

<sup>55</sup> Ibid., S.36.

<sup>56</sup> Ibid.

<sup>57</sup> Ibid., S.37.

<sup>58</sup> Ibid., S.38.

よって教会礼拝 (*Gemeindegottesdienst*) が起こり、全教会 (*die ganze Gemeinde*) が成立し、存続する」<sup>59</sup>。先ず第一にこうした具体的な個々の地域的教会、すなわちローカル・チャーチがバルトによれば「一にして聖なる公同の使徒的教会」であった。しかしバルトにとって、この地域的教会が「一にして聖なる公同の使徒的教会」の唯一の形態ではなかった。地域的教会が十全な意味で教会であれば、地域的教会相互の関係においても、すなわち、「それらがお互いを間接的に同一のものとして認識し合い承認し合い、またその存在に関して、したがってまたその存在の革新・改革に関して、互いに援助し合い、助言し合い、さらにその限りにおいて——指導し合う」<sup>60</sup> ことにおいても教会は現実に存在する。むろん諸教会間の「指導」とは相互の「奉仕」のことにほかならず、諸教会の上に立ったり下にあったりするものが考えられているのではない。じっさいそれもまた「再び一つ教会 (*Gemeinde*)」<sup>61</sup> であるのであって、バルトはそうした組織を「教会会議としての教会」<sup>62</sup> (*Synodalgemeinde*) ないし「母教会」 (*Muttergemeinde*)<sup>63</sup> と呼んだ。そしてそれらも、まさに教会として、「神の言葉の霊的權威」<sup>64</sup> の下に立つものであった。そしてそれが、とり分け教会の「『公同的』、『エキュメニカルな』性格」<sup>65</sup> をになうとされていることから明らかなように、再建過程にあったドイツ福音主義教会 (EKD)、また「世界教会協議会」 (WCC) の形成のことが視野に入っていたと見て差し支えない。さらにバルトによれば、その他の教会の諸々の組織・団体もそうした「地域的教会」、「教会会議としての教会」と結びつきつつ、「それぞれの特別な形態で同様に一にして聖なる公同の使徒的教会であれという、その要請と責任から、決して逃れてはならないのである」<sup>66</sup>。

さて本論文の締めくくりの部分はバルトがかなり思い切って会衆主義的教会形態に高い評価を与えた箇所としてつとに知られている<sup>67</sup>。こうした評価はバルトが、教会を徹底してゲマインデという概念から発想したことから由来している<sup>68</sup>。そこからしてバルトはそ

<sup>59</sup> Ibid.

<sup>60</sup> Ibid., S.39.

<sup>61</sup> Ibid., S.40.

<sup>62</sup> Ibid.

<sup>63</sup> Ibid.

<sup>64</sup> Ibid.

<sup>65</sup> Ibid. 傍点による強調は筆者。

<sup>66</sup> Ibid., S.41.

<sup>67</sup> 「何人かの改革派の人たちはその長老主義的な額にしわを寄せた」。W.A. *Visser't Hooft*, Karl Barth und die Ökumenische Bewegung, *ibid.*, S.15.

<sup>68</sup> 第一のテキストを再送付した日 (1947年4月1日) にE・サルトリウスに書き送った手紙を参照せよ。「厳密に『会衆の集いの出来事』として考える教会理解から私は、教会の《上なる權威》の概念全体を——司教制の形態においても、会議制の形態においても——解体し、(多少とも、《ビルグ

れ自身「まったく新しい道」<sup>69</sup>というのでは決してない会衆主義的教会理解をゲマインデ（Congregations）から教会を理解するものとして評価した。バルトは会衆主義的教会形態の利点をいくつか挙げつつ「エキュメニカルな価値と効力」がもっと明確に示されるともした。しかしこの論文の第二のテキストである短縮版<sup>70</sup>では、会衆主義的教会形態ないし秩序が教会一致の問題に満足した答えを与えるとは認められていない。「この論文はこの特殊な形態の無批判な採用の申し立てではない」と述べて、教皇制、監督制や長老制あるいは会議制同様に批判を免れているわけではないことを明らかにしている<sup>71</sup>。とはいうもののバルトは、会衆主義、すなわち神の自由な言葉の自由なCongregationsという観念には健全さがあり、そこには教会の秩序をエキュメニカルに考える上で不可欠な諸要素が存在することを認め、論文の終わりでバルトは、第一のテキストではフリードリヒ・ローフスの言葉を借りて、短縮版の第二のテキストでは西洋の過ぎ去りつつある「キリスト教世界」（*corpus christianum*）という言葉を用いて、領邦教会崩壊後の教会形態として、会衆主義的教会形態が将来を持つことにならないか誰が知ろう、それは「預言者的な言葉」（第一のテキスト）であったのかも知れないと記し、また第二のテキストでは「今このもう一つの方向へ目を向ける」ことを勧められていると書いて全体を締めくくった。バルトの徹底したキリスト論的<sup>ゲマインデ</sup>な教会理解がこうしたエキュメニカルな出会いを果たしたというべきであろう<sup>72</sup>。

## (2) アムステルダム大会

1948年8月22日、日曜日の午後、壮麗な新教会（Nieuwe kerk）での開会礼拝によって幕を開けた大会は、早くも翌23日の午前、コンサートヘボウで始まった本会議（Plenary Sessions）でもっとも重要な瞬間を迎えた。十四人委員会と暫定委員会の名でM・ベグナーによって提案された世界教会協議会成立案が承認されたからである。盛大な拍手があり、議長は参加者に立って黙祷をささげるように求め、さらに神の祝福を求めた。会議はその日の午後から始まり、9月4日まで続いた。

---

リム・ファーザーズ》のやり方にならって）すべてを会衆（Gemeinde）を基礎として再構築しました」。エーバーハルト・ブッシュ『生涯』486頁、参照せよ。

<sup>69</sup> Ibid., S.43.

<sup>70</sup> 注29を見よ。

<sup>71</sup> *World Council of Churches* (hg.), *The Universal Churches in God's Design*, in: *Man's Disorder and God's Design*, A one-volume edition, pp. 75-76.

<sup>72</sup> バルトは1948年1月14日にフィセルト・ホーフトにアムステルダム大会運営に関わって次のように書いている、「[教会の] ベーシック・ドクトリンについて他のところで審議され議決されるのに、その間会衆主義的な預言のための部門を立ち上げることなど、努力するに値するとは私には思われません……」。Ibid., Briefwechsel, S.221f.



さてこの二週間にわたる大会の経過については、準備過程についてと同様にわれわれはバルトに関連するかぎりで簡単に触れるだけにしたい。全体に関わることをはじめにいくつか記しておくべきであろう。

われわれはすでに大会の総主題が「人間の無秩序と神の救済計画」であり、この主題にそって設けられた四つの部門または分科会 (Sections) によって周到に準備が重ねられてきたことについて述べた。本大会もじっさいこれらの分科会の議論を中心に展開されることになったが、各種委員会——たとえば人事のための推薦委員会やメッセージ委員会など——のほか、大会に四つの委員会 (Committees) が設置され午後の時間を使って協議の時がもたれた。四つの委員会のテーマは「教憲・規則・規約」(I), 「方策」(II), 「プログラムと運営」(III), 「教会の諸関心」(IV) であった。このIVは、さらに四つに分けられた。「教会における女性の生活と働き」, 「ユダヤ人に対するキリスト者の関係」, 「教会における信徒の意義」, それに「キリスト者の再建と教会の相互援助」である。青年代議員, 代理人, 一般参加者も礼拝をとまなう上記諸集會に参加しただけでなく, 青年代議員のために独自のミーティングが開かれたし, 一般参加者のための講演も多く企画された。大会後半, 8月30日からは, 大会をいわば総括する本會議が開催され, 各種報告が承認された。最終日の9月4日に「大会メッセージ」(The Message of the Assembly) が採択されて閉會した。最後に代議員たちは西教会 (Wester kerk) で礼拝をささげ, 二週間に及んだ大会は閉幕した。

バルトは大会に積極的に参加した。何より大会2日目の午後の本會議(8月23日), 彼は二人のメイン・スピーカーの一人として(他はC・H・ドッド)最初に開會講演を行ったし, 準備段階からメンバーとして加わっていた第一分科会(「神の救済計画における普遍的教会」)の協議に参加し, 教会一致のための報告の作成に至るまで深く関与した。そのほか午後にはフィセルト・ホーフト夫人ヘンリエットの参加した「教会における女性の生活と働き」委員会に加わった<sup>73</sup>。大会期間中に開かれた(9月1日)改革派の特別集會にも参加し短い話しをしている。大会が終わって10月バーゼルのマルティン教会でのスピーチで自らを「《エキュメニカー》なる新改宗者」<sup>74</sup>と紹介したように, バルトが大会に深い

<sup>73</sup> Vgl., J. Moltmann, Henriette Visser't Hooft und Karl Barth, in: L. Schottroff und J. Thiele (Hg.), Festschrift für Dorothee Sölle, 1989.

<sup>74</sup> 「私が世界教会の會議に——こうした企てを遠くから批判的に眺めることをせず——協力し, 終わってからも喜んでそれを振り返って見るなどということは, 以前なら夢にも考えられないことだったでしょう。……つまり私はここで《エキュメニカー》という新改宗者として話しているのです」。K. Barth, Eindrücke von Amsterdam, in: Amsterdamer Fragen und Antworten, TEH, NF 15, 1949, S.20.

感銘を受けたことは間違いない<sup>75</sup>。

以下われわれは、はじめにバルトの開会講演を検討し、その上でこの大会でセンセーショナルなほどに人々の注目を引くことになった第4分科会でのダレスとフロマートカの対論を取り上げ、それとの関連でバルトの立場をさらに明確にしたい。大会期間中の改革派の集会でのスピーチは、次項「アムステルダムの余韻」でヴィブキンゲン講演『スイス改革派教会におけるエキュメニカルな課題』（1949年5月）を取り上げるさい言及されるであろう。

#### a. 開会講演「世界の混乱と神の救いの計画」

バルトはこの講演における自らの「課題」を、主題を巡って何か特別な神学的構想を展開することではなく、バルト自身も称賛した巧妙な組織による準備作業を振り返り、準備資料に目を通したさいに心に浮かんだ「全体に対するいくらかの意見」を述べて協議の導入とするところにあるとした<sup>76</sup>。

講演全体は三つに区分されるであろう。三つの問題領域が扱われる。第一に「世界の無秩序と神の救済計画」という表題の順序を巡る問題提起、第二に、神の救済計画と教会の使命の関係、そして第三に、四つの分科会それぞれについてバルトの考えるこれから始まる協議のポイントである。

はじめにバルトは大胆にも主題の順序を逆にして考察した論じてはならないかと問題を提起する。というのも彼によれば、われわれは聖書から、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられる」という言葉を読むからである。「神の『救済計画』は、上にある。しかし、世界の無秩序も、またこの無秩序の原因についてのわれわれの考えも、この無秩序を克服するためのわれわれの提案や計画も、それらすべてのものは、下にある。それらすべてのものが（われわれの教会的存在をも含めてのことであるが）どのような意義を持っているかということは、もしそれが認められ理解されるとすれば、ただ上からだけであり、ただ神の救済計画に基づいてだけである」<sup>77</sup>。この上から下へ、これこそが「われわれに命ぜられたリアリズム——キリスト教的リアリズム」<sup>78</sup>にほかならない<sup>79</sup>。

<sup>75</sup> 「アムステルダム 1948 年はカール・バルトとエキュメニカル運動との間の諸関係の歴史における転換点であった」。W.A. *Visser't Hooft*, Karl Barth und die Ökumenische Bewegung, *ibid.*, S.19.

<sup>76</sup> *Barth*, Unordnung, S.3.; *Ders.*, Eindrücke, S.20.

<sup>77</sup> *Barth*, Unordnung S.3.

<sup>78</sup> *Ibid.*, S.4.

<sup>79</sup> K・ホフマンは、このバルトの主要な主張を、バルトが遂行してきた神学の「パラダイム転換」の延長線上に理解し、とりわけ開会講演の背景として 1933 年の講演「神学の公理としての第一戒」

次にバルトは最初の批判的問題提起をさらに推し進め、神の救済計画と教会の使命との関係について語る。というのも主題には「解釈学的誤解」が含まれているだけでなく「教会論的誤解」も含まれるからである<sup>80</sup>。彼によれば、キリストの体なる教会という聖書的概念から教会が受肉の継続であるというような聖書的でない誤った言い方が——ローマ・カトリック教会において——なされてきた。しかしもしそのようなことであれば「父なる神の右におけるイエス・キリストの支配は、またしたがって神の摂理の働きは、いわばキリスト教界の管理に移行したということになるであろう」<sup>81</sup>。してみればバルトが最初に提起した疑念が教会論の領域でも当てはまるということになる。「神の救済計画」ということによって「キリスト教的マーシャル・プラン」のようなものが考えられるということになりかねないからである。しかしバルトによれば、「キリストのからだは、ただまったく彼らに対して完全に現臨したもうが同時に彼らの上にいますあの方に基づいてだけ生き、あの方によってだけ生き、あの方に向かってだけ生きる」<sup>82</sup>。それゆえ教会は希望と信頼のすべてを「ただ彼ご自身に」かけなければならぬ。かくてバルトは言う、「私が次のように言う場合に、すなわち、われわれは、この会議のこの最初の日、教会と世界のための憂慮がわれわれ自身の憂慮でなければならぬかのように考える考え方を背負っているとすれば、われわれは、何事も達成しないであろうし、教会と世界における無秩序を、いよいよ増大するより他はないであろうと言う場合に、われわれがこの大会に集合するに当たって懐いている真剣さと善意と期待を、決して弱めようとするのではなくて、むしろそれをその正しい基礎の上に置こうとするのである」<sup>83</sup>と。

かくてわれわれはここに共に一つの群れ (Gemeinde) として集まって、「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ、主はそれをなしとげたもう」(詩篇 37・5) という御言葉に従うとき与えられる「自由の証明」, 「靈的自由の態度」とはいかなるものとなるのであろうか——「靈的自由の態度」とはバルト自身の説明によれば「神にだけ寄り頼んで、人間に寄り頼まず、まして自分自身に寄り頼んだり、何らかのキリスト教的企てに寄り頼んだりしないという態度である」<sup>84</sup>。これらのことを最後にバルトは、大会の四つの部門(分科会)ごとに語ることになる。

を挙げている。Klaus Hoffmann, *Ibid.*, S.109.

<sup>80</sup> T. Herwig, *Karl Barth und die Ökumenische Bewegung*, S.157f.

<sup>81</sup> Barth, *Unordnung*, S.3-4.

<sup>82</sup> *Ibid.*, S.5.

<sup>83</sup> *Ibid.*, S.6.

<sup>84</sup> *Ibid.*, S.8.

第一部門（「神の救済計画における普遍的教会」）が問うているのは、要するに教会の一致の問題であった。バルトはここで『教会と諸教会』（1935年）ですでに提示したキリスト中心の教会一致の立場を改めて示唆したと言ってよいであろう。その上で二つのことをいわば「有益な」「試練の火」として取り上げている。一つは聖晩餐が共に守られなかったことであり、もう一つはローマとロシア正教会からの参加がなかったことである。聖晩餐は大会では教派ごとに守られ<sup>85</sup>、全体では祝われなかった。彼はそのことを、次のように、すなわち「われわれは、ここで、重苦しい意識をもってではあるがしかし良心をもって、ただひとりの主の不完全な教会であることを許された」<sup>86</sup>として受けとめた。そして「われわれは、そのようなばらばらの聖晩餐にもかかわらず、ただひとりの主イエス・キリストのための自由を獲得し主張することを試みなければならない」<sup>87</sup>のである。ローマとロシア正教会が招待を断ったことについてはバルトは一般の受けとめ方とは別な反応を示した。ただたんなる「嘆息あるいは憤慨」ではなく、そのような拒絶において「神の力強い御手」を認めなければならないのである。その上で三つのことを述べる。第一に神はわれわれに、われわれの光がキリスト教的と見なされているそれらの世界にすら差し込むことができなほど弱くみすばらしいものかを示してくださったということ。第二に神は、「キリストに向かう運動」をしようと思わない彼らと共に不完全な仕方さえ一つの群れであることはできないのであるから、彼らとの不毛な対話をむしろ免れさせてくださったのだということ。そして第三に、われわれはわれわれの計画を明瞭な仕方で妨害するのを神はよしとしたものであるから、それによってかえってアムステルダムの方の正当性をわれわれは確信し、それゆえにわれわれは「神を讃美し神に感謝する」ことをすべきではないかということ。

第二部門（「神の救済計画への教会の証し」）は福音宣教における教会の委託、端的にミッションの問題である。ここでもバルトは基本的に次のように問う、すなわち、神ご自身だけがなしとげることのできることをわれわれキリスト者と教会人が行わなければならないかのように考えているのではないかと。彼によれば準備資料が「何か深い悲しみの蔭のようなもの」に覆われているように思われたと言う。教会の宣教の出発点は教会の主によってすでもたらされた「勝利」にある。教会は「神の証人」としてその証しをなすことが許されているのである。「私の考えによれば、この問題領域において、われわれにとって

<sup>85</sup> Vgl., W.A. Visseer't Hooft (ed.), The First Assembly of the World Council of Churches. The Official Report, 1949, S.17-18.

<sup>86</sup> Barth, Unordnung, S.6.

<sup>87</sup> Ibid.

の唯一つの問題は、〈どのようにして、われわれは、あらゆる計量的思考から自由になり、あらゆる統計から自由になり、目に見える結果についてのあらゆる期待から自由になり、キリスト教世界に向かうあらゆる努力から自由になるか。どのようにして、われわれの証しを、われわれすべての者がそれによってだけ生きることができる神の憐れみの主観性についての証しへと形成し、聖霊がその保証を決してこぼみたまわないうであろう証しへと形成するか〉という問題以外にはないのである」。

最後に第三部門（「教会と社会の無秩序」）と第四部門（「教会と国際的な無秩序」）、社会的・国際的無秩序の問題とそれに対するキリスト教的態度決定の問題である。教会の預言者の委託、すなわち、教会の政治的見張りの役とその社会的サマリア人の奉仕という委託を「現代においてわれわれに与えられた認識に従って」どのように遂行すべきであろうか。バルトは二点指摘する。第一に、教会がこの世に対して告知するのは「神の国」であって「われわれが良しとする何かの観念や原理の国」、何らかの「プログラム」ではないということである。バルトは今回モスクワのロシア正教会がわれわれを十把一絡げに「反民主主義的」と断定したのかも知れないと疑問を呈しつつ、その次元で<sup>あいたい</sup>相対することをせずに、次のように述べる、「それには、一片の真理も含まれていないのであろうか。私は、そのような点から、同時代の西欧の他の人々の大多数にくらべて、われわれが、より悪い態度で接するとは言わないまでも、より良い態度で接し得ないことを、恐れるのである」と。ここには冷戦の時代の、とりわけ西側諸国における教会の在り方についてのバルトの基本的立場が示されているであろう。第二に、教会は神の国を「告知」しうるにすぎないのであって、政治的見張りの役を果たし社会的サマリア人の奉仕をなすとき、「神が建てたもうゆるがぬ都を待ち望む」のであって、キリスト教の協力によって建設されるべき将来の国家を待ち望むのではない。悪しき世を善き世に変えるのは神の御業であってわれわれの業ではない。われわれが世界の政治的・社会的無秩序のただ中において、神の証人であり、イエスの弟子また僕であるということが、われわれに求められている一切である」。さて開会講演の最後をバルトはイザヤ書の引用で締めくくったが、誤解に満ちたざわめきの中で、意図が十分に伝わったという手応えを得ることは必ずしもならなかったらしい<sup>88</sup>。

<sup>88</sup> E・ブッシュの『日録』には次のようなことが記されている。「バルトに当時の状況が甦ってきた。彼がそこで主題講演をしたこと、彼はそれをしようとは全く思っていなかったが、フィセルト・ホフトによってそうするようじっさい強いられたこと、またその講演で『ともに計れ、しかし、成らない……』〔イザヤ8・10〕という聖書引用によって困惑と怒りを引き起こしたこと——しかしそのため聴衆はそれに続く言葉すなわち「神は我らと共におられる（インマヌエル）のだから」を、まったく驚きあきれる中で、聞き逃すことになったこと……」。Eberhard Busch, *Meine Zeit mit Karl Barth*, Tagebuch 1965-1968, Göttingen 2011, S.540.

ともあれこのバルトの開会講演が大会全体の協議に関わる重要なオリエンテーションになったことは確かである。次項でわれわれは第4分科会の議論をたどって、それを明らかにしたいと思う。(つづく)

(2016年9月12日)